



できる
イ妹
は
ですか？
3

089夕ロー

挿絵/saxasa

立ち読み版

序章

妹でもデキていいんですか？

一章

お兄ちゃんとならデキたいです！

二章

おニイとデキたかったもん

三章

アニキとデキちやいたいの……

四章

アニキとデキちやうなんて？

五章

おにーちゃんとデキるって決めたもん

六章

妹妻だからいっぱいデキるもん！

登場人物紹介

Characters



たねよしかりん
種由花梨

あまり感情を出さないが常に兄の傍にしようとする物静かな三姉妹の末妹。時折鋭い言葉を発するが根は心優しい少女。



たねよしもえな
種由萌菜

三姉妹の長女で小桃とは双子。姉妹一背が低く長女に見られない童顔で口り巨乳だが、一家の母親役を担うしっかり者。



たねよしこもも
種由小桃

しばしばドジを踏むおっとり天然な次女。素直な性格で、兄にベッタリ甘える時は姉妹一の爆乳でドキドキさせてしまう。

たねよしりょういち
種由亮一

幼少期に両親を亡くして以来、妹たちとの生活を守るために全力を尽くし続けるシスコン気味の少年。

花梨もクスリと小さく微笑み、自分のクレープを姉と兄に差し出してくれる。

「……おニイも、食べて。桃ネエも、みんなで、一緒に……」

「花梨……うん、みんなで食べよう」

「はいっ。じゃあ、みんなで一緒に」

三人は微笑んで、一つのクレープに仲良く同時に口をつけていた。

(いいな、これ。すごく、大事だっと思える)

みんなで顔を寄せ合って、目と目を合わせながらお菓子を食べる。それだけで家族だと感じられて、心が暖まってくるようだ。

しかも——ほとんどを食べ終えたところで、顔を寄せた左右の美少女らは、ぽーっと頬に色味を出して兄の唇に唇を寄せる。

「お……お兄ちゃん、小桃……キス、したく……」

「……花梨も、キスしたい。おニイと初デートで……キス、あげたい」

「そんな、二人とも急につ？」

瞳を潤ませる二人を見下ろして亮一は目を丸くしていた。

公園の真ん中で、三人の男女が頬を寄せ合ってお菓子を食べる。考えてみれば珍妙な光景だが、これが恋人同士なら、なかなか悪くないシチュエーションだった。

「お兄ちゃん、好き……大好きです。昔からドジばかりの小桃なのに、一生懸命養ってくれて。小桃たちのお父さん代わりになってくれて。前にも言いましたよね？ 小桃、こん

なにステキな男の人、見たことないんですよ？」

これは小桃の本心だった。やはり苦労は人を育てる。親を亡くし幼くして一家の柱になった亮一は、普通の少年より何倍も努力しなければならなかった。その経験が、妹を励ます明るさと優しさを作り上げていたのだ。

「お兄ちゃん。まだ迷っているんですね？ 分かります、小桃だって突然のことで、もうびっくりしちゃって。でも、嬉しかったんですよ？ だって、この想いが本物だって分かったから。お兄ちゃんを愛しちゃっても、いいって分かったから」

恋慕に煌めくグリーンの瞳がまっすぐにこちらを見上げてくる。柔和でたおやかな美しい顔に温かく肉感的な肢体。どれもが堪らなく女性的で、男の本能をくすぐってくる。

「小桃……」

「お兄ちゃん……」

——ちゅっ。

二人は自然と唇を重ね合わせていた。すでに想いは視線が伝え合っていた。

（小桃……やっぱ好きだ。感じたい。もっと、愛してあげたい……）

一途な想いを聞いた心は身体の芯まで熱くしていた。ずっと大事にしてきた妹。がむしやらなまでに愛してきた彼女。その求愛を、これ以上拒むことなんてできない。

「お、おニイ……か、花梨、も……花梨も、キス、したい……」

「花梨……いいのか？ オレ、兄ちゃんなんだぞ？」

「いいっ！ 花梨だって……愛してるから。いつも引つ込み思案な花梨に優しくしてくれて、どんなときでも守ってくれて。そんなおニイの赤ちゃん……産める。産みたいの……」
花梨もまた、珍しく声を荒らげて兄の胸元に縋りついてくる。姉のキスに感化されたのか、大人しそうな黒い瞳には女の子らしい嫉妬が見えた。

（花梨、こんなに震えてるのに、恥ずかしいのに、キスを）

必死に唇を差し出す姿に少年も胸が熱くなってくる。ここは公園。少ないが人目は確実にあるし何人かはこちらを見ている。

花梨はそれを理解していて羞恥を隠しきれていない。それでも兄に愛して欲しくて、姉に負けぬよう背伸びしながら睫毛を光らせ待っている。

「花梨……分かった。花梨も、大好きだよ。ちゅっ」

「んっ……ちゅ、おニイ……」

震える華奢な肩を抱き寄せ、想いを込めてキスをする少年。男としても兄としても、これ以上花梨を焦らすことなどできなかった。

「ん、ちゅく……お、おニイ、キスう……う、嬉し……」

「あん、小桃もキス、したいですう……ちゅ、んちゅ……」

傍から見れば異様だったかもしれない。仲良く食べていた少年少女はそのまま唇を中央で寄せ合い、三人同時にディープキスへと発展させたのだ。

「んはあ、おニイ、しゅ、しゅき……舌、感じて、欲しい……」

「んちゅ、小桃もお、んふ……いつふあい、舐めてくらふあい……！」

もう、頭がショートしそうだった。背伸びしてくる美人妹らは兄のキスに蕩けていって、チロチロと舌まで絡め合わせてくれていた。

（ああ、やつぱりだめだ。一度エッチしちゃったから、もう拒めない。どんどん、好きになつていく）

自然と二人の柔腰を抱いて亮一はボンヤリと自覚していく。そう。本当は分かっていた。自分は妹を女として愛している。いつの頃からか魅力を感じて恋心を隠してきたのだ。

今でも常識は弁えている。だがそれでも、燃え上がる恋慕は妹たちの舌を舐めさせ、つやのあるリップに唾液を塗り込んでいく。

「つはあ、はあ、はあ、お、おニイ、キス、上手すぎ……」

すっかり上気した表情で花梨は小さく喘いでみせる。ディープキスなど全員初めて。けれどただどしきは、情熱と愛情がカバーしていた。

（花梨、小桃、オレも……よかった。頭、じんじんしてくる）

黒と緑の瞳に映るのは、どうしようもなく発情してきたカッコ悪い自分の顔。

けれど妹たちにとっては亮一の表情は嬉しいものだった。

「おニイ……しよ？ 赤ちゃん、作るの……」

「そうですね。小桃も、また……繋がりたいです」

「そ、そんな、ここで？ 人もいるのに！」

驚く兄の手を引くと、妹二人は人目を避けて公園内の雑木林に連れていく。

(ここ、昔はよく探検したっけ。そういや、滅多なことじゃ人は来ないんだよな)

深くなつていく木々を眺めて亮一は何となく感慨に耽ふけつた。ヤンチャだった子供の時分は、よくここで妹たちを一人にして泣かせてしまったものだ。

「……ここなら、誰も来ないから。だから、お、おニイ……」

やがて一本の樹木の前で、花梨と小桃は立ち止まった。兄の前後で膝をつき、二人してズボンに手をかけてくる。

「か、花梨、小桃も？　ちよ、こんなところでっ？」

「ごめんなさいお兄ちゃん、でも、きつとここなら大丈夫。そ、それに小桃、こ、今夜も、お願いする気だったし……」

以心伝心というところか。姉妹は示し合わせたように兄の下半身を露出させると、すでに硬化していたペニスを愛おしげに取り出した。

「お、お兄ちゃん、もう、硬く……嬉しい。小桃に……赤ちゃん、授けたいんですね？」

キスに興奮した姿を見て、小桃はポツと頬を染めた。少年が赤面し口籠くちかごもると、嬉しうに、でも周囲を気にしながら、セーラー服の胸元を開く。

現れたのは、清純派な彼女らしい純白のブラだった。雪の結晶がプリントされていて初々しいのに地味すぎない。そんな乙女チックなものだった。

目を丸くする兄の腰前で、小桃は恥ずかしげに微笑み、ブラの谷間に指をかける。

「う、うん。大丈夫、誰も見てない……お兄ちゃん あのお……お、おつ、おパイズリつていうの、させて、ください……!」

——プチンッ。ぷるるっ、たぶるるんっ!

フロントホックが外された途端、二つのカップはハラリと落ちてたわわな乳房がまろび出てきた。

（おお、小桃の、おっぱいっ! や、やっぱ、大きいっ! 色も白いし、乳首、薄いピンクで可愛いっ）

改めて見る彼女の乳房に亮一はまたも心を奪われる。Gカップもの豊満なバストはあまりにも白くて美味しそうで、まるでミルクでも溶かし込んだかのように。乳首も小さくて愛らしいし、色も汚れなど知らぬような純粹すぎるベビーピンクだ。

小桃はそれを両手で持ち上げると、深い谷間でペニスを挟み込んでくれた。

「ううっ!! こ、小桃、こんなの、どこでえ……?」

「そ、そのお、お友達から聞いたんです。お、お、おっぱいの大きな女の子って、好きな人にはみんなこうしてあげるって……」

どうやら小桃は妙な知識を吹き込まれたようだった。素直な彼女は信じきって、人目をなおも気にしながらも健気に乳房を動かしてくれる。

——たぶんっ。たぶっ、たぶっ、ぷるんっ、にゅぷ……

「うああ、す……すごい。小桃、それ、気持ちいいよ……」

人生初のパイズリ体験に、亮一は腰を震わせながらぼーっとしてしまっていた。

小桃のオツパイはとても柔らかく、まるでつきたてのお餅みたいにもっちりとサオを包み込んでくれている。肌も見た目よりずっとスベスベで、蕩けるようなまろやかな肉感が、鳥肌が立つほど快感だった。

さらに背後では、跪くもう一人の妹が、何とむき出しのお尻を撫でながらそこに口付けしてくれた。

「おニイ、気持ちよく……なつて？ 花梨たち、がんばるから。おニイの赤ちゃん産めるように、いっぱい、いっぱいエッチするから……」

「か、花梨、そんな……ああつ！」

——ちゅっ、ちゅ……れる、れる……

指でそつとワレメを開くと、少しザラつく熱い舌が尻の奥を刺激してくる。初めての感覚に、少年の背筋は堪らずゾゾツ、とってしまった。

「あ、ああつ！ 花梨、そんなとこ、き、汚いっ。うああ、舌っ、入りそうにいつ？」

猛烈な羞恥に亮一は身震いしそうだった。まるでクンニされる女性の気分を味わっているかのようにだった。

「んちゅ、くちゅ、れる……だいじょう、ぶ。おニイの、だもん……花梨、ちつともキライじゃないよ？」

細い指先がさらに開いて兄の後孔を露出させる。ペニス以上に恥ずかしい部分に少年は

堪らず、あつ！と驚く。

が、躊躇いを感じさせるような震える吐息、その濡れた唇がそつと近づいてくると。
「はあ……お、おニイ、好き……愛、してる……ちゅっ、れろれろっ！」

「うああ花梨ッ！ あ、あひああ……ッ！」

とうとう亮一は情けない声で喘ぎ始めてしまっていた。パイズリだけではない。まさかアナルまで女性に舐めてもらえるなんて、夢にも思っていなかった。

（そんなあ、ぎ、ザラザラしててヌルヌルしてて、そんなのが、お尻の穴をお……ッ！）
男だつて羞恥心は性的興奮を高めるもの。ましてアナルは自分では見られず無様だという先入観が強い。それを見られて味わわれては、心と身体が熱く火照ってどうにかなつてしまふそうだった。

「ちゅ、んっ、じゅる……ああ、どう？ おニイ……気持ち、いい？」

「はあ、はあ、花梨、そんな、無理しなくても……」

「……無理じゃ、ない。花梨、おニイにベタ惚れだもん。こんなコト……おニイにしか、できない、もん……」

「？ か、花梨？」

亮一はふと背後を見下ろし、そこで改めて気付かされた。

そう。花梨も恥ずかしくて仕方ないのだ。大人しい彼女がアナルを舐めるなんて、無理しなければできないことではない。

「っ……花梨、桃ネエや萌ネエみたく、おっぱい、大きくないから……おニイにしてあげられるの、ココしか、ないから……」

耳まで真っ赤になった妹は、伏し目がちな瞳に雫をいっぱい溜めている。きつと兄以上に羞恥に耐えていたに違いない。

それでも、震える舌を懸命に伸ばして再びアナルに当ててくれる。パイズリ刺激にも負けないように、肛門のシワを何度も何度も優しく舐めて。その大胆かつ健気な愛撫に、兄少年の腰と心はみるみる昂っていった。

（花梨、手も震えてる……なのに舌、いっぱい出して。シワ、吸ってくれて……おっぱいの大きさをなんて、ぜんぜん気にならないのにつ）

花梨なりにコンプレックスもあるのだろう。それでも異性に好かれたくてがんばる女の子の姿というのは、やはり男心をくすぐらずにはいられない。

おかげでペニスは完全勃起してしまい、小桃を興奮させていた。

「ああっ、お兄ちゃんのおちんちん、す、すごい、ですう……！　こんなに、かちかちに……！！」

それはまさに、自分たちを女と見てくれる十分な証拠。そう理解する爆乳美少女は、グリーンの眼差しを柔らかくしてオッパイを激しく動かしてくれた。

「ううっ!!　小桃っ、そんなにすると、お、オレっ、もう！」

「ああ、だ、出してくれるんですね？　小桃と花梨で感じてくれるんですね？　嬉しい……」

…小桃、もつと相応しくなりたい。お兄ちゃんのお嫁さんに、お兄ちゃんの赤ちゃん産める女の子に……！」

——たぷりゅんっ！　ぷるっぷるったぷったぷりゅっ！

おおっ！　と亮一は呻いてしまった。すっかり愛欲に浸った小桃がパイズリのピッチを上げてきたのだ。

途端に快感がサオを突き抜け尿道をぴりぴりと痺れさせる。辜丸もキュッと収縮してきて射精準備を整えていく。それだけでなくとも小桃の爆乳はふわふわもちもちの極上オッパイだ、パイズリ向きの柔乳の前には未熟なペニスなど脆もろすぎる。

「くうっああっ！　ま、待て小桃っ、このままじゃオレ、で、出ちゃうっ！　お前の顔にか、かけて……！」

兄少年はギリギリの理性でそう訴えた。太長いペニスは谷間でシゴかれ鎌首をアゴへと向けている。出せば当然、小桃の顔に飛び散ってしまう。

「はっ、はっ、はあ……いい、いいですよ、お兄ちゃん、出して、お顔に出してくださいさあい……小桃、お兄ちゃん色に、染まりたい、ですう……！」

「んじゅっ、ああ花梨もお……花梨も、おニイに出して欲しい。いつでも、出してもらえ
る女の子に、なりたい……！」

「花梨まで！　おああっ！　な、ナカまでっ、うああっ！」

ついには花梨の温かな舌が、ヒクヒクしていたアナルの中にまでちゅる……っつと進入し

てきていた。

(ああつか、感じすぎるうつ！ お尻っ、ちんちんっ、どつちも痺れてええっ！)

腸壁までもチロリと舐められ尾てい骨が快楽に浮つく。寒気にも似た甘い痺れに背筋が強硬直していく。

前後を乳房と舌に挟まれもう快感には逃げ場がない。ただ膝はガクガクし、身体が仰け反って発射態勢だけ整える。

トドメは、淫戯で汗ばんだ柔らか乳房の絶頂を促す巧みな愛撫だった。

「あん、お兄ちゃん、びくびくつて、あ、熱くつてえ……き、きて、くださあい、小桃の、おっぱいにい……！」

——たふたふんっ！ むにゅうううつ！

「うああ小桃おっ！ イク、出るうウツ！」

堪らず亮一はわなないていた。まるで纏わりつくかのような上下に交差したタップリの乳房。その根元とカリ首への同時刺激に限界を超えさせられていた。

——びゅうううつ！ びゆく！ びゆく！ びちゅっ！

気持ちよさげに開く鈴口は無遠慮に精液をぶちまけていく。腰前で跪くパイズリ美少女は、その洗礼をただ顔で受け止めるしかない。

「あは、ああああ……！ お兄ちゃん、あ、熱いの、いっばいい……！」
「うぐっ、ああああっ！ ご、ごめん小桃、おっぱいで出しちゃって」



「ああごめんっ！ ま、またナカでっ！ でもオレ、花梨のこと、あ、愛して——！」
 「ああらめ！ おニイ好きいつ！ 好きって気持ち、止まんないのおっ！」

普段大人しい妹なのに、このときばかりは声を大にして悦びを示す。そんな彼女への愛も深まり少年もドクドクと精液を流し込む。

やがて——激しく達した乙女の肢体がひとしきり痙攣をした後で。

——キィィィ……

不意に入り口から物音がして、恍惚に浸りながら亮一はそちらを振り向いていた。

「ツツツ!!! も、も……萌、菜……!?!」

開いたドアの向こうには、栗色のショートカットの小柄な愛らしい妹がいた。

「な——なに、よ……なによ、これ……」

きつと花梨の盛大な声が聞こえてしまったに違いない。どこか寝ぼけ眼の少女は、しかしみるみる驚愕に目を見開きあんぐりと口を開いていく。

「い、いや、違う……こ、これは、だな……!!」

少年もやつと我に返って死ぬほど焦って言い訳する。

が、思い切り中出ししている最中にできるはずもなかった。

「な——なにが違うのよーっ！ こおおおんのおーバカアニキ——っっ!!」

「信じらんないばかばかあほアニキ！ 妹とえっ——その、し、しないうって言ってたクセ

に——っつ!!

学校からの帰り道。まだまだ明るい夕焼けの路上で萌菜の怒声が轟き渡った。

「ごめんっつ!! ほんつと、騙すつもりはなかったんだ!」

浮気を見つかった男よろしく亮一は拝むように謝る。

あの朝の後、萌菜は完全にヘソを曲げて顔を合わせては怒りっぱなしだった。無理もない、自分の知らぬところで自分以外の家族全員が子作りなんてしていたのだから。

兄は、そんなことしなないと言っていたのに、だ。

「小桃と花梨もだよ! アタシたち実の兄妹なんだよ? そりゃ、お爺ちゃんはあるなコト言ってたケド……もーっ! これじゃアタシだけ、バカみたいじゃん……!」

最後のほうは涙目になって萌菜は俯いて鼻を吸った。

(くそっ、萌菜を傷つけちゃった。うそついた拳句ハブっちゃまったみたいにして)

肩を震わす小柄な妹を少年はそつと抱き寄せた。

「……ごめんな。みんな兄ちゃんが悪いんだ。ロクに相談もしないで爺ちゃんの話、OK みたいなこと言うから!」

「ぐすつ……そーだよ。せめて、もつと前に話聞いてたら、もう少し考えられたのに……!」

よほどショックなのか、萌菜は珍しく兄に身を任せている。逆に少年も辛くなった。だが、黙って話を聞いていた二人は珍しくムツとしていた。

「……萌菜ちゃんの言うことも分かります。でも小桃たち本気です。萌菜ちゃんはお兄ち

やん取られちゃってもいいの？ せっかく妹でも結婚も出産もできるのに、ほかの人に譲っちゃうの？ 小桃はぜったいいやです！ それにお爺ちゃんを助けたいっていうお兄ちゃんの気持ち、大事だと思う。小桃、そんなお兄ちゃんの力になりたい。お嫁さんになって赤ちゃんいっぱい産んで、一生支えていきたい！」

こ、小桃……と怯む萌菜。ドジな少女の思わぬ気迫に本気で驚いていた。

普段気弱げな三つ編み少女もここぞとばかりに口を開く。

「萌ネエは、どうなの？ いやなら、いい。花梨たちがおニイのお嫁さんになるから。萌ネエの分まで赤ちゃん産むから」

「そ、そんな……ひどい、アタシだけ除け者にしちゃう気っ？」

「だって萌ネエはおニイと結婚したくないんでしょ？ 兄としてしか見てないんでしょ？ 花梨たちは違う。ほんとはお爺ちゃんに言われる前から、おニイのこと好きだったもん。見ると心、ふわあつてしてきて。一緒だと胸、きゅんっ、てして。普通じゃないって……ただの兄妹じゃないって、ずっと思ってたもん……！」

「っつ！ た、ただの、兄妹、じゃない……？」

その言葉を聞いた途端、萌菜の表情がサツと変わったのを兄は見逃さなかった。

(？) 萌菜、どうしたんだ？

正直、萌菜のほうが正しく思えた。自分も最初はそう思っていた。兄として妹に接するべきだと。

なのに萌菜は、いつしか花梨に反論できなくなっていた。

「萌ネエは違うの？ おニイに……なにも感じない？ ほら、こうやっておニイと腕組むと花梨、おニイと結ばれたい、え、エッチ、したいって思うよ？」

兄少年の腕を取り、まるで恋人を取られまいとするような花梨。その仕草と真剣さに萌菜も吞まれそうになっていた。

「うう……アタシ……アタシ、だつて……でも、でもっ……」

紫色の萌菜の瞳がウルウルと潤んで悔しげに歪む。ああは言ったが、兄を大事に思っているのは彼女だつて同じなのだ。

「……花梨、ちょっと言いすぎだぞ？ 普通は……萌菜の言うことが正しいから」
見かねた兄が論すと、花梨はシヨボンとしてしまう。

「……ごめんなさい、おニイ。萌ネエ。でも……萌ネエ、素直じゃ、ないっ」
「ふえっ？ す、す、素直じゃない、つて……そんな、こと……」

「萌ネエだつて、おニイのこと好きなくせにっ」

「ツツ!! ち、ちが、そ、そんなの、ちが……う……」

「ならなんで怒るの？」

「……………っ」

末妹の静かな追及に、小柄な長女は完全に沈黙させられていた。

気付けば全員道端で足を止め、人気のない夕焼けの中で無言で見つめ合っていた。

「……あ、アタシ、アタシは……だつて……」

追い詰められたかのように、萌菜は迷いの仕草を見せる。

だが、その結論は、とてもここでは出せるものでもなかった。

「あつ！ いたいた、亮一君っ！ 大変なの、すぐお爺様のお屋敷に来てちょうだい！」
不意に現れた黒塗りの高級車、そこから出てきた叔母の登場も沈黙に拍車をかけていた。

「——萌菜、いるか？ ……いないか。どこいったんだろ？」

広い屋敷をうろうろしながら亮一はため息をついていた。

祖父の邸宅はやっぱり無駄に広くて困る。来客用の部屋だか何だかがいたるところに存在していて、もしも自分が主だつたら全改装してやりたいと思った。

時刻は夜。今日もこのまま泊まりになるが、今回は気の重くなる話ばかり聞かされる羽目になっていた。

「お爺様が本格的に入院されたの。そうしたらみんな、すぐにも跡継ぎを決めたいって集まってきて。もしも亮一君が引き受けてくれるなら、みんなに申し出て欲しいの」

そう言つて叔母は亮一たちを再びここに連れてきた、跡取りになるイコール子作り必須ベストな伴侶は妹たち。まさにそれで採めていたのに、うんざりなタイミングだった。

（爺ちゃんの予想どおりだ。みんな後釜狙いだなんて、爺ちゃんの心配が先だろつての！）
もちろん心配していた人もいた。叔母なんかは、まさにそのいい例だ。だが、ちよ

跡継ぎになれそうな連中は互いに睨み合いなんて始める始末。

これでは家族想いな祖父も安心できるわけがない。亮一もついで、反抗的な口を挟んで睨まれてしまっていた。

「……やっぱ、力になりたい。当主なんてガラでも趣味でもないけど、せつかく爺ちゃんが守ってきたグループをメチャクチャにされたんじゃない」

亮一に自覚はないが、無欲で家族を大切にしているその氣質が、祖父に大きく買われていた。ともあれ今は、萌芽を探している。結局今まで相談できなかった相手だ、今回こそはきちんと今後を話し合いたかった。

(どこいったんだろうなあ。あ、もしかして洗濯物か？ 今日も部活で汗かいたしなあ)
何だかんだで家事のほとんどは萌菜の役割だ。小桃はドジでなんでだかレンジが爆発するし、花梨は兄にベツタリすぎて別行動を取りたがらないためだ。

亮一は使用人が使うであろう洗濯場へと足を運んだ。
「お、明かりが点いている。やっぱここか？」

少しだけ開いたドアの隙間から亮一はそつと中を覗いた。ノゾキではない。使用人もしれないと思っただけだ。

「もーっ、アニキったらまーた汗びっしょり。ほんとと、世話焼けるんだからっ」

予想は正解だった。大きな洗濯機が並ぶ部屋では、ショートカットの小柄な美少女がぶつくさ言いながら洗濯物を洗っていた。

「んしょ、つと。もーっ、小桃も花梨もアニキのと一緒にまとめちゃって。ちよつとは恥ずかしいとか思わないのかなあ。パンティとかだつて見られちゃうんだし」

（はは、やっぱりしつかりしてるな萌菜は。こりやいい奥さんになれそうだ）

邪魔をするのも何となく悪くて少年は少し黙って見ていた。萌菜はちゃんと衣類をより分けて乾燥の済んだものは綺麗に折りたたんでいた。

ここは祖父宅。頼めば使用人さんたちが普通にやつてくれるだろう。なのに自分でやるところなどは家庭的で微笑ましい。

（風呂の残り湯でやつてるからいつも遅いんだよな。家計のこと、考えてくれてるんだ）

本当は萌菜もバイトしたいと言っているが、困ったことに小柄すぎて「中学生を働かせている」と勘違いされた経験がある。そのため今は、こうした裏方で出来る努力をしてくれている。萌菜は不満タラタラだけれど亮一は十分に感謝していた。

まさに兄妹のお母さんの存在。そう思つてつい苦笑し、声をかけようとして――

「……ああ、アニキつたら……ほんと、汗っかきなんだからあ……っ」

（？ な、なんだ？）

萌菜の変化に気付いて亮一は思い留まっていた。

なぜだか萌菜は、兄のシャツを鼻先に当てると、すう……つと深く息を吸い込んでいた。

「あ、はあ……っ。あ、アニキの、におい……キツイ……なんで？　なんで、頭、ぼーっとしちゃうのお……」

驚いたことに、萌菜はシャツのにおいを嗅いでなぜか陶醉しているようだった。

「すんすん、はぁあつ。あぁつ、頭じんじんするう。身体、熱くなつて……あぁやだぁ、お爺ちゃんち、なのにい……」

ちようど亮一からは、彼女の側面が見える角度だった。可愛い鼻には自分の衣服。畳んだ衣類の前に正座するブカブカトレーナーの寝間着姿。

(ど、どうしたんだ？ オレのシャツのにおい嗅いで、なんだか、色っぽく……)

ここ数日間に見た、どこか艶かしい濡れた眼差し。それが今、萌菜の瞳にも現れている。頬もほんのりと色をつけてドキッとさせる表情だった。

やがて、シャツに当てた鼻先の吐息が次第に小刻みになってくると。

「はぁ、はぁ、あ、アニ、キい……んっ！ んんっ！」

——ススウ……ピクッ！ ピクッ！

何と少女の細い指が、ホットパンツの中に忍び込みモゾモゾと動き始めていた。

(えっ？ え、ええっ?! こ、これってまさか、お、オナニー?)

そうとしか思えなかった。なぜなら彼女は、パンツの前辺りをしきりにまさぐって腰をピクピクと震わせているのだ。

おまけに片手と鼻先には、いまだに兄の汗濡れたシャツが。

「すんすんっ、あはぁぁ……！ だ、だめ、アニキのにおい、キツイよぉ……なんで？
なんで、アニキのにおいだとこんな……オマ○コ、熱くなっちゃうのお……っ！」

亮一はドアを挟んで硬直してしまっていた。兄との結婚を拒む妹は、けれど兄のいいでオナニーしてしまう女の子だったのだ！

(そんな？ いつも真面目でまともな萌菜が、か、陰でこんなことっ)

どれだけ目を凝らしてみても、彼女の仕草は自慰そのものだ。現に内股は少しずつ開いて膝がゆっくりと立っていく。デニムタイプの布地の中では指が蠢きを激しくしていく。

「はあ、はあ、だめ、パンティ……汚れちゃうっ。脱いで……お、オマ○コをお……っ」

ついにはパンツとパンティを脱ぎ捨てると、萌菜は膝立ちで両足を開いて股間を前に突き出す。兄の位置からは見えない陰部に中指を当ててそっと押し込む。

「んんんっ！ くふんっ！ だめ、だめええっ、ナカ、こんななっちゃって、ああ指止まらないよおお」

——くちゆるっ、るちゆるちゆるっ！

ワレメの奥はもう愛蜜でいっぱいなのだろう。指が少し動いただけで粘っこい水音が聞こえてくる。

夢中になってきた小柄な美少女は浸るように目を閉じて身悶えた。

「んっはあはあっ、アニキいい、あ、アタシっ、どおしたらいいのおっ？ 妹なのに、兄妹なのに、アタシこんな……にやうんっ！ 好きってキモチ、溢れちゃうよオッ」

(ツツツ!! も、萌菜、オレと、おんなじこと悩んで……そうか。萌菜もしちゃっていいのか迷ってたのか)

亮一も鼻息を荒くしながら、彼女の内心が何とはなしに理解できた。

「ああ、アニキい……ほ、ほんとに、妹としちゃったの？ おちんちんずぶずぶして、あんっ！ セーしどくどくしてえ……小桃と花梨に、た、種付け……アタシ、切ない、よお……アニキ、パパ、ママ、どーしたらいい？ アニキ、す……好きだけど、アニキ好きで好きでたままないけど、でもアタシ、妹なお……いきなり、いきなり結婚とか子作りなんて、どーしていいのかわかんないよお……！」

そう。亮一も同じだった。妹がとても魅力的で、美しくって可愛くって。告白したいほど大好きなのに妹ゆえに言い出せない。そんな本音をずっとひた隠しにしてきたのだ。

思えば萌菜も、兄妹で結婚できると聞いてひどく戸惑っているようだった。いけない関係を急に全力で勧められたのだ、すぐに理解を示すほうがむしろ変わっているだろう。

（それに萌菜、昔は泣き虫だったもんな……でもしつかりしなきやって肩肘張るようになったから、ぜんぜん甘えなくなつて……）

自称種由家のお母さんだ、ブラコン全開ではいられなかったに違いない。そう思うと、何だか自分まで悲しくなってくる。

同時に、兄を想って高まる様子に股間が熱くなつてきてしまう。

「はあはあ、アニキ、アニキい……！ ごめん、こんなヘンタイ、だめだよね？ 幻滅しちゃうよね？ においなんかでオナニーしちゃつて……は、恥ずかしい、よお……！ こんな、いえないよおっ！」

素直になれない小柄な妹は裸の腰を前後させる。まるで騎乗位で悶えるように。中指を兄の勃起と想って濡れたオマ○コでシゴくように。いつしか肩まで小さく縮めて豊かな胸まで揺すって悶えていく。

「ああアニキごめんっ！ アタシだめっていつてえ、小桃たちにもだめっていつてえっ。でも、でもアタシ、怖いよお、好きって言っちゃうの、こわいよおっ！」

（お、オレもだっ！ 兄妹じゃなくなるの、怖くってっ！）

家族の絆が壊れてしまうのが怖かった。その思いも間違いない。自分から妹を求めることができなかった。

けれど今、自分のにおいをオカズにして切なげに身体を慰める萌菜を見て、どうしようもなく胸と股間が熱くなる。

「はあ、はあ、萌菜、萌菜あっ」

気付けば亮一はズボンを脱いで、いきり立つ肉棒を激しくシゴいてしまっていた。あの中指がコレの代わりだと思おうといっぱい突いてあげたくなる。涙まで流して喘ぐ妹を思い切り抱いてあげたくなる。

しかも萌菜は後ろに倒れると、背筋で大きくブリッジを描いてオナニーラビアを曝け出した。

（ああっ見える！ 萌菜のアソコ、桃色のアソコっっ！）
わずかに角度が変わったおかげで妹の秘所が見えてしまう。



〔萌菜……やっぱり、ステキだ。エッチなところも、愛してあげたい……〕

今の亮一は、妹を恋愛対象としか見れなくなっていた。小桃と花梨が本音を気付かせてくれたのだ。だから今度は、自分が萌菜の本心に応えてあげなければいけないと思う。

「——萌菜、ありがとう。すごい気持ちよかった。今度はオレが気持ちよくしてあげたい」
「……え？ あ、ああつ？ あ、アニ、キい……」

小さく声をあげる彼女を少年はそつとベッドに寝かせた。怖がらせないように、仰向けの身体に覆いかぶさつてそつと腰から手で触れていく。

「あ、い、いや……アニキの、手え……つ」

生まれて初めての異性の愛撫に少女は細かく身動きする。身体は準備を始めていたのか弱い刺激でピクツ、と跳ねる。

初心な妹を愛おしく思いつつ、亮一はブラにそつと指を伸ばしていた。

「萌菜、あの……む、胸、見てもいいか？」

「ふええつ？ そ、そん、な、アニキ、アタシ……」

「……見てみたいんだ。可愛い萌菜のおっぱい」

「っつ！ ば、ばか……アニキの、えっちっ……」

少女は弱々しく悪口を言うが、どう見ても強がりだった。本当は大好きな兄に迫られ、内心喜んでしまっている。

その証拠に、捲り上げられたトレーナーを直そうとはしなかったし、兄の指がブラに届

いても濡れた眼差しを逸らすばかりだった。

「うふふ、大丈夫。お兄ちゃんは優しいですから」

「萌ネエ、安心してて……」

小桃と花梨も応援する中、縞柄プリントの可愛いブラが優しく上にずらされていた。

——ぶるんっ！　ぶるりんっ！

「おお……これが、萌菜のおっぱい。大きいな……それに、キレイだ……」

「っ……は、恥ずかしい、よお……っ！」

ツツと恥じらしいの涙を零して横を向いてしまう萌菜。けれど少年の言うように、彼女の乳房は本当に美しいものだった。

多分、小桃の乳房とは対照的なだろう。小桃の胸が柔爆乳なら萌菜の胸はムッチリ巨乳だ。元氣と若さを表現するようにぱん、と張りがあつて瑞々しい。

それでいて形は綺麗なお椀型。身体が小さい分、余計に膨らみは目立ちまくっている。乳首なんかは消えそうなほどの可愛い小粒で、魅惑的なのにどこか愛らしかった。

「ステキだ萌菜。さ、触る、よ？」

「えっ？　あ、ま、待って、アタシ、心の準備……ふぁ？　ああんっ……！」

——むにゅっ、むにゅっ、たぶっ、たぶぷりっ……

彼女の言葉が終わる前に、少年は我慢できずに両手で乳房に触れてしまっていた。

「ああ、温かい……萌菜のおっぱい、ぱんぱんで、吸い付くみたいで気持ちいい……」

「はああ、ら、らめえ、アタシっ、初めてでえ……あんっ、恥ずかしいのに……熱く、なつちやう……！」

まるでふつくら出来立てのパン生地みたいな感触だった。表面はふんわりと温かく、張りのある丸みは撫でるだけでも心地いい。指をかすめる可憐な突起も、ピン、と小さく勃起していて愛撫に自信を与えてくれた。

また何よりも、イヤ、イヤ、と首振る美少女が甘い鼻声を漏らしていくのは堪らなく艶かしい。

「ああ、んっ、くふう……んっ！　い、いやあ、アタシっ、触られてるう、アニキにっ、お、おっぱいいい……んふう！」

「ゴクッ。萌菜、いいんだ感じて。お、オレも、お前見て興奮してるから」
今の亮一は、ただ愛欲に身を任せているのではなかった。

自分を想って慰めていた妹。自分と同じ、兄妹の垣根を越えるのが怖くて言い出せなかった美少女。そんな彼女を癒やしてあげたくて、自分から行かなければと考えていたのだ。
（萌菜、ごめん。陰でコソコソ小桃や花梨とシちゃって。でもオレ、お前のことも、あ、愛してるんだ……！）

萌菜の行動が、かえって彼を素直にさせたとも言える。好きと言われるのは嬉しいが、好きと言えない女の子には男からアタックしたくなるものだ。

「んふう！　ら、らめ、アニ、キ、おっぱい、撫でて……んあ！　や、優しい……っ！」

「うふふ、小桃も分かります。お兄ちゃんの手、とつても優しく丁寧で、おっぱい、じん、ってしちゃうんですよね？」

小桃が横から覗き込んでも、萌菜はもう反応できなくなりつつあった。兄の手つきは実に繊細で、まさに愛情を感じさせてしまうのだ。

「あんっ！ アニ、キいい……んあ！ ち、ちく、びいい……っ！」
——くりっ、くりっ。

少年の指が突起を転がすと萌菜は堪らず鳴いてしまう。妹たちの愛撫に事前のオナニー、拳句は兄とのいい雰囲気と、すでに感度を高める下地は出来上がっていたのだ。

「はあ、はあ、あ、アニキい、アニっ、キいい……！」

「はああ、か、可愛い、萌菜。腰、動いてる。アソコも濡れてて……」

優しく責められる小柄な肢体は、まるで無垢な子供のような仕草だった。バンザイするように両腕を上げて半脱ぎのトレーナーを首元に残し、涙を溜めた当惑の眼差しで揉まれる胸を見下ろしている。

だが、Fカップもあるふくよかなバストとシュツとくびれたなめらかな腰、ふっくらとした丸みの臀部が年頃らしさも魅せている。おまけに無毛のデルタ地帯は、再びオナニーしたみたいにびっしよりと愛蜜を溜めていた。

「……萌ネエ、そろそろ……したい？ おま○こ、いっぱい濡れてる」

「そ、それ、はあ……んあ!! い、いやあ……!!」

今度は花梨が横から手を出し、萌菜の両足を優しく開かせていた。

M字になったその中心には、兄で濡れる初心なラビアがヒクヒク震えて華開いていた。

「萌ネエ、もうびしょびしょ。やっぱりココは、おニイラブだね。赤ちゃん欲しそう」

「ほんとですう。萌菜ちゃん、ちっちゃいけど、大人っぽいですう……！」

亀裂みたいな可愛いワレメは、兄からの求めに従順に応じて肉ビラをちよっぴり出してしまっていた。愛蜜も今や溢れるほどで、その下の小さな後孔までトロトロにしていた。

（ゴクリツツ！ もつ、萌菜と——し、したい。抱きたい——！）

亮一の中に改めて愛欲が漲みなぎってくる。異性への感情が、妹にはつきりと向けられる。

（間違いない。爺ちゃんの言うとおりだ。オレ、妹と結ばれたいんだ。な、中出しして、孕ませちゃいたい……！）

亮一はもはや我慢できず、いよいよカリの狙いを定めて萌菜の肉ビラにそつとあてがう。

「ふああ……？ アニキ、あた、しい……」

「……萌菜、オレ……オレのほうこそ、しっくししたい、んだ……！」

（萌菜も、素直になって欲しい。オレのこと、好きって言って欲しい！）

言葉にできない彼女に代わって自分から求めて繋がっていく。本気の愛情を視線に込めて見つめ合いながら勃起を進める。

——ぶちゆりっ。ぷりゅ、つぷりゅ……

「んあああつ！ あ、あはあつ！ ああ、アニキいつ、ほ、ほん、き……？」

「うん。ごめん。オレ、ほんとはずつと前から、お前たちのこと——」

——好きだった。そう囁いて、瞳を丸くする可愛い妹に小さく唇を押し当てる。もううそはつきたくないし、惑わせることもしたくなかった。

やがて——カリ先が薄い出っ張りに当たって処女膜がぶるん、と揺れたところで。

「ああ……アニ、キ……こ、このまま……きて、ほしい……っ」

愛らしいほどに童顔な美少女。その淡い唇が、躊躇いがちに——だが確かに求めてくれた瞬間、兄の肉棒はグッと進んで処女膜をプツリと奪い去っていた。

「ひうう——あふ、ふああああんっ!!」

「だ、大丈夫か萌菜？ その、こういうのは、一気にしたほうが痛くないって聞いて」

亮一なりに研究した結果だった。いくら不慣れであっても、ちゃんと女性を悦ばせたいとは思っていたのだ。

一方、破瓜を味わった小柄な美少女は、一度大きく仰け反った後で戸惑いもあらわに腰をくねらせていた。

「んあつ、あ、あんっ!! つあ、あはあ……っ。す、すご、い……うそ、アタシ、えっちしちゃうてる……あ、アニキ、と……」

「……萌菜？」

「あ、アニキを……あん、感じるウ……。す、すご、うそ、みたいっ。夢じゃない、よね？ アタシっ、ちゃんといえっちデキてるよね？」

どうしてだか、萌菜は苦痛よりも驚きのほうが強いらしい。半ばまで埋まった肉棒に目をやり拳を口元に当てている。

不思議に思つて見つめていると、萌菜は兄の視線に気付いてポツ、と頬を染め直した。

「だ、だつてえ……みんな、ちっこいつて言うし、あ、アソコも、もしかしたらつて……ちゃんとデキるか、し、心配、で……も、もーっ！ 笑わないでつたらあ！」

ついつい笑みを浮かべた少年は、ごめん、と苦笑して謝った。

どうやら、しつかり濡らしておいてから一息に貫いたことが、少女への苦痛を幾分か和らげていたらしい。少年は安堵し、愛しい妹の汗ばむ頬をすつと掌で触っていた。

しかも頬に触れられてはにかんだ萌菜は、次の瞬間、可愛らしい嬌声を漏らしていた。

「んにゃんっ!! あ、あふ……んっ！ ひあ、なにこれえ？ やんっ！ ふ、深いトコ、あ、当たつてえ……っ！」

「も、萌菜、痛いかな？」

「ち、ちがつ……あ、アニキの……おつきいから、深いトコ、こつん、つてええ……ん」

シートカットの小さな妹は、お腹をさすつて戸惑っている。

それもそのはず。兄の立派な勃起ペニスと萌菜の膣には大きすぎて、根元まで入らずとも一番奥まで届いてしまうのだ。

「はあ、はあ、や、やああ、深いトコで、びくん、びくんつてえつ。んにゃんっ!! そ、反つちや、いやあん……！」

おかげで敏感な子宮唇がカリ先にぶちゆりとキスされてしまう。子宮の感度も高められて、萌菜は堪らず鳴いてしまった。

（も、萌菜、かっくく可愛い……！ 深いところが感じるんだ）

奥を優しくプッシュすると、あんつ、と可愛い鳴き声を漏らす。気持ちよさげに腰もくねらす。そんな彼女が愛おしくつて、少年は頬を両手で挟むと再び唇を重ねてあげる。

「んっ、ちゆる……ふあ、あ、アニキい、におい、またあ……」

「うん、いっぱい嗅いで欲しい。オレも萌菜の香り、欲しいから」

「そ、そんな……んあ、ちゅっ、くちゅ、ぢゆるる……！」

燃える少年が舌を差し出すと少女も唇を開いてくれる。躊躇いの残る舌を、たどたどしくも絡めてくれる。粘っこい水音を一緒に聞きながら仲良く愛欲に浸っていく。

（萌菜、好きだ……おま○こも、気持ちいい）

姉妹とはいえ睦の作りは三者三様のようだった。萌菜のヒダはぷりぷりしていて摩擦感が物すごく、粒の数もとても多くて最高なまでに刺激的だった。

おまけに愛蜜は溢れんばかりでぷりっぷりなのにヌルヌル滑る。窮屈な上に刺激が強くであつという間に射精感がこみ上げてきた。

「ぢゆるっ、ちゆる、くちゆるっ……んああ、はっ、はっ、あつ、あにっ、あにきいっ、あ、アタシ、どおしよ、初めてなのに、きっ……気持ち、いいよお……！」

涙を溜めた紫の瞳は当惑しながらトロンとしていく。ディープキスで濡れた唇はヌラヌ

ラと輝き息を弾ませ、兄のにおいに悦ぶ小鼻はなおもヒクついて体臭を吸い込む。

「いいんだ萌菜、オレたち、相性いいんだ。こ、子作りできる、身体なんだっ」

「こっ、子作りっ？ アニキと、子作りっ……ふにゅああつつつ突いちやらめえんっ！」

亮一はいよいよ我慢できなくなっていた。粒ヒダもぷるぷるで素敵すぎるし、子宮唇もカりに吸い付いて気持ちよくて堪らない。

「んにゃ、にゃふうんっ?! らめあにきい、奥う、オクっ、ついちゃらめ、やだ、いっつちや、いっつちや——ふにゅああんっ!!」

——ぷしゅあつ！ ぷしゅつ！ ぷしゅしゅつ！

ピストンされた小さな美少女はラビアから飛沫を散らしてしまった。驚いたことに、奥を小刻みにプッシュされてすぐイってしまったようだ。

「すごいですう。萌菜ちゃん、初めてなのに、とつてもエッチ……！」

「むう……萌ネエ、相性よすぎっ」

他の二人も嫉妬するほど萌菜の感度は高いようだった。本当によかったのか、M字に開いた両足を震わせお尻を少し上げている。まるで、もつと突いて欲しいみたいだ。

「ひあ、あ、あにき、怖いよお……アタシっ、ぜんぜん痛くなくって、オマ○コ、どんどんきゅんきゅんしてえ……！」

けれど本人は快樂に戸惑い耳まで真っ赤にしまっている。亮一は愛情をさらに感じて彼女のバストをむにゅつ！ と揉んだ。

「ふああ!? ら、らめあにきい、おっ、おっばいもおお!」

つぶらな瞳を大きく開いて脇を締めて驚く萌菜。それでも少年は裾を捲って巨乳をもつと大胆に出す。ブカブカトレーナーの可愛らしい肢体、そのぷるんぷるん弾むたわわな果実を優しく激しく揉みしだいていく。

「ああいいっ! 萌菜、ステキだ、おっばいもすごい弾力あるし、おま〇こもぐいぐい締め付けてるっ!」

「そっそんなあ、それらめえ! は、恥ずかし、あに、あにつくくんにやあああっつ!!」

——ぱんぱんぱんぱんくちゅくちゅるちゅるちゅっ!

こらえきれない膺快樂に少年の腰は激しさを増す。子宮口まで亀頭で擦ってエラで愛蜜をドパドパとかき出した。

イヤイヤと首振る萌菜だったが身体は兄を求めていく。小柄で巨乳な敏感肢体は両足を大きく開ききって、トロトロになった桃色ラビアを自ら勃起に差し出していく。腰も今やクネクネクねり、セックス特有の艶かしさを思い切り魅せ付けていた。

「はあつはあつ! あにきい、またいつちゃう、どおしよ、またイちゃうよおおっ!」

火照った顔に涙を伝わせ絶頂の予感におののく妹。そんな姿に酔い痴れながら少年は根元までサオを埋める。

「ひっひにやあああふかいつ、ふかいよおおっ! あっ——あにきいいいいん——!!」

「萌菜っ、好きだ、い、イク——!」

「おニイ、出してあげてっ。萌ネエのおま〇こ種付けしてあげてっ」

「お兄ちゃん、萌菜ちゃんのもの、中につっ！」

小桃と花梨も横から抱きつき深い密着を維持しようとする。まるで三人で萌菜を抱いているみたいだった。

萌菜のほうも身体は兄ラブ全開だった。心はまだ迷っているのに膣肉はきゅんきゅん勃起を締め付け、子宮唇は強く吸い付き先から子種を吸い出そうとする。

しかも両足は、大好きな兄にしっかりと巻きついて。

「あつつあにきいいん、す——すきいつ、な、ナカあ……っ！」

「つつつ萌菜ああつ、イクよっ！ 出るよっつ！」

——つっびゅふううううっつ！！ どくん！ どくん！ どくどくどくん！

淫毛を肉土手に触れさせたまま亮一はついに発射していた。小桃と花梨、萌菜にも腰を固められ膣内射精をウツトリと許されてしまっていた。

「んにゃああああにきいいいんっつ！！ あっつ熱いよっ、熱いのどくどくきて——んにゃあいきゅううんんっ！！」

萌菜はパツ、と涙を散らして甲高い嬌声を張り上げていた。もしかしたら姉妹で一番兄ラブな子宮、その潤いきった受精器官が精液でパンパンに満たされたのだ。卵巣さえもが悦ばされて身震いせずにはいられなかった。

「つつっはあ、はあ、はあ……！ 萌菜……よ、よかったよ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、未完の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!